

【第1部 日本画】

これから日本画の作品についてお話させていただきます。日本画担当の森田でございます。

今年の県展は、ご承知のように、3年ぶりの開催、かつ70回記念の節目の展覧会となりました。

3年の期間の思いの詰まった作品が多く応募がありまして、また、従来の岩絵具を中心とした作品はもとより、水墨画の作品も多数見られて、表現の幅、技法の幅、それぞれ作者の思い、そういったものを審査する側も堪能することができました。また、具象の作品、抽象的な作品なども見られて、今後の日本画の更なる展望といったものが感じられる作品展となっております。

(埼玉県知事賞 「影」 古山 由樹)

埼玉県知事賞を受賞されました古山さんの「影」と題された作品です。

こちらの作品ですけれども、構想から完成までの行程が非常に時間がかかった綿密な研究と取り組みでの作品となりました。

実景の部分とおそらく作者の構想の部分のあいまった表現で、ビルのガラスのような壁面に映ったものとか、実景の部分と、また、作者の心象風景とでもいえるような構成になっています。また、技法的にも、日本画の古来からの砂子や伝統的な技法を駆使して、ひとつの、静かではあるのですけれども、その中に作者の訴えたい、表現したいものが詰まった作品となりました。

(埼玉県議会議長賞 「Space」 安藤 克也)

こちらの県議会議長賞の作品、安藤さんの「Space」という作品ですけれども、この作品も画面近くで見るとお分かりになりますけれども、全面に布地のようなものを貼って、表面に凹凸のあるマチエールを表現していますね。

こちらもおそらく板壁のような実景の部分を基にして、そこから着想を得ての作品だと思うんですけれども、具象と抽象の相半ばする作品構成となっています。

よくみるとこういったところに蛾のようなものが止まっていたり、気づかされる部分もあるのですけれど、これも銀箔であるとか、日本画の伝統的な素材の表現がされていて、具象・抽象を超え、また伝統的な技法を超えて、日本画の新たな展望となるような作品の1つになりました。

大変堅牢なしっかりとした画面で、この賞に相応しい作品となりました。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「めざめ」 中 明子)

県教育委員会教育長賞、中さんの「めざめ」という作品ですけれども、この作品は、私は1日会場におりまして、何度も拝見しましたけれども、じっくり見れば見るほど、作者の想

いが伝わってくる作品です。

マチエールも決して厚塗りではありませんし、岩絵具も細かい粒子を中心に使って色数も抑え、淡い色調の作品ですけれども、人物が2人配されて、目を閉じた人物と開いた人物の、それぞれの心の中から見る側に訴えかけるような雰囲気作品となっています。

静かな中にも作者の想いが伝わる温かい、大変素晴らしい作品に仕上がりました。

【第2部 洋画】

(埼玉県知事賞 「何をみつめて」 渡辺 浩子)

それでは埼玉県知事賞、今回のグランプリ、私の感想を述べますね。

埼玉県知事賞、タイトル「何を見つめて」、渡辺浩子さん。

淡いジョンブリアンが同じ淡い緑系の画面の中に取り入れられています。母娘と思われる二人の視線の先は、一見同じように見られますが、よく見ると若干のずれがあるようにも見えます。同じ屋根の下に暮らしながらも、「人は一体何を考えているのであろうか？」という、そんなモヤモヤした気持ちのようなものも画面に漂う、ある意味で哲学的内容も含まれている作品に仕上がっています。画面全体もしっかりと構成された秀作です。

ちなみに、6月1日、割と早い時間にご本人が見えまして、私が書いた感想についてお話をしましたら、全くドンピシャリの評ですと、作者から太鼓判を押されました。

今の複雑な世の中、親子であってもお互いが何を考えているのかなという、懐疑ではないですけども、疑問を持たれるような情景を作品にされたという話を、ご本人がなさっていました。

(埼玉県議会議長賞 「燕4号」 棚澤 寛)

埼玉県議会議長賞、「燕4号」、棚澤寛君の作品です。

春一番、初めて見た燕に喜び空を舞う少女、眼下に広がる赤城連山を背にした市街地を思わせる街並み。フォトリズムの表現を駆使し、上空から見える街並みを正確にとらえ、臨場感溢れる力作となっています。

これも後日談なんですけど、この作家をよく知っている審査員の先生の言によりますと、上空からの情景を描くには、ヘリコプターをチャーターして上空から眺める、そういうことがときどきあるという話を聞きました。そういう経験がある結果でしょうね。この上空からの町並みが非常に現実味を帯びた情景になっています。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「集積回路」 亀井 広明)

それでは、埼玉県教育委員会教育長賞、「集積回路」、亀井広明君。

この作品を一目見れば、一目瞭然 “IC” そのものです。しかし作者の意図するところはもっと深いところにあるように思えます。宇宙の光と影、膨張と縮小。遠くない未来の予兆を感じさせる策略が見え隠れしているような気がします。

一つの方向にひたすら歩んできた秀作です。

(埼玉県美術家協会会長賞 「透明な記憶」 山本 智之)

埼玉県美術家協会会長賞、タイトル「透明な記憶」、山本智之君の作品です。

落書きと思われるような壁の前に少女が立っていますね。これらは隠された落書きの跡ですね。そしてその前にある、黄色と青に塗り分けられた、ところどころに割れたガラス窓が見受けられる電車。遠くにはぼんやりと灯る街灯。その下に飛び出し注意の看板であると思われるかたち。

見た人に幼き時の出来事を懐古させ、遠い記憶の中に引き戻してくれる心温まる不思議な秀作であります。

(高田誠記念賞 「山間の湖」 石井 百合子)

静かに深く透き通る水面に水中から飛びあがり、ホバーリングをしている清流の宝石ともいわれる 1 羽のかわせみ。白く泡立つ波、早朝の湖面に見られた直前の一連の情景を連想させる心やわらぐ作品と思われます。

この水面にできた輪。しかも画面がマットな感じで日本画を彷彿とさせるような、洋画にしては異色な作品だと思います。

【第3部 彫刻】

彫刻部審査主任を務めさせていただきました齋藤と申します。

今回彫刻部の応募作は、前回は上回る大変多数の応募をいただきました。

コロナ禍の中でも皆さんが制作について非常に真摯に向かっていたいただいて、技術を高めてくださったんだなということに感動いたしております。

応募作が前回より大変多かったものですから、どうしても審査の方が厳しくなっていました。入選率は下がってしまいましたが、その分大変にレベルの高い展示になっていると思います。

(埼玉県知事賞 「永劫」 本田 史弥)

埼玉県知事賞を受賞されました、本田史弥さん。タイトルは「永劫」です。

テラコッタという大変難しい材質でありながら、等身大を超える大変大きい女性坐像を作っていただきました。着実なデッサン力に支えられた人体表現はもちろん、量感のあるフォルムや、洗練された流れるような曲面で表現されたコスチュームが、全体にゆったりとした穏やかな空間を作り上げています。

表面の仕上げも顔の表情もずっと整っておりまして、柔らかな中にきりっとした美しさが見られます。

審査員も満場一致の選考となりました。

(埼玉県議会議員賞 「なびくかたち」 森下 聖大)

埼玉県議会議員賞、森下聖大さん制作、タイトルは「なびくかたち」です。

こちらは木彫のレリーフ的作品です。遠目に見ると流木とか木の皮か何かを使っているのかなと思ってしまいますけれども、近づいてよく見てみますと、木目を生かした、たゆたうような起伏が美しく、さらには所々穴が空いているのを見ると、裏側からも大変丹念に彫り進めて、この厚みを作っているのだなということが分かります。背景に置かれた四角いパネルも、本体とのサイズ差や色合いが絶妙で、全体に洗練されたデザインとなっています。

過去には大変パワーを感じるような作品を作られていたと思うんですけれども、今回はそれに繊細さも加わり、素晴らしい作品となっています。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「コネクティング『ボルト』」 榮 一男)

埼玉県教育委員会教育長賞を受賞されました榮一男さんの制作、タイトルは「コネクティング『ボルト』」となっています。

こちらは本焼きをしたと思われる陶素材でできているのですけれども、本当に鉄で出来ているかのような色味やボルトの造形の完成度が高く、落ち着いた重量感を与えています。そこに偶然割れたかのように、意図的に傷をつけたのかもしれないんですけれども、金継ぎを思わせるような色が置いてあり、その場所のテクスチャが曲面に気持ちの良い緊張感を与えています。

一步間違えると工芸の方の領域になってしまうんですけれども、全体の形のバランスですね、それがとても、いろいろな角度から見ても面白い表情を与えていますので、彫刻としてとても完成度の高い作品になっていると思います。

【第4部 工芸】

点数が少し減るかなと思ったんですけどもね、前回の 69 回展よりもちょっと微増して、301 点搬入がありました。

今回 70 回記念ということで、良い展覧会を工芸でしようという皆さんの協力の下に、少し厳しかったんですけども、50 パーセントを割って 49.5 パーセントの入選率となって、場所的に今まで少し点数が多かった分だけ少し狭い感じがしたんですけども、今回厳しくなった分だけ点数がゆったりと展示できるので、記念展に相応しい展示になったかなと思っています。

その中で、なんでそんなに厳しくなったのかなというと、工芸というものに対する認識というんですかね、「工芸というものはこういうものだ」という認識の下に出品される方というのは割合とそんなに多くない。そういう面でどうしても選外になってしまったという部分が結構あったんですね。だからちょっと厳しいようなんですけども、その辺をもう少し出品される方が考えてやってくれたら良い作品になるんじゃないかと思うんですけどもね。

(埼玉県知事賞 「待ちぶせ」 隈井 純子)

この待ちぶせという題の蛙の像なんですけども、これは 1 枚の銅板を叩き出して造形をしたものなんです。

ハイヒールの上に燕尾服を着た蛙さんが座って待っているという形なんですけども、これは男性の蛙ではないかということで、そのひとつの象徴として、ハイヒールの上にちょこんと座っているということ、隈井さんという女性が表現したかったんじゃないかなというように感じております。

なかなか造形的にも素晴らしく、本当に蛙が生きているかのような感じがして、花もちゃんとちょこんと持っていて、待ち伏せというちょっとユーモラスな題ですけども、素晴らしい作品じゃないかなと思います。

(埼玉県議会議長賞 「五角形敷き詰め寄木文箱」 水野 健吉)

この作品はですね、指物の技法を用いている文箱なんですけども、五角形の寄木造なんです。この材はといいますと、神代楡という、神代というのは土の中に埋もれている木のことをいうんですけども、その楡の木で作られております。褐色っぽい色合いになっておりますけども、神代というのは大体そういうような色合いのものがありますね。

この箱の素晴らしいところというのは、神代楡の色合いの目の美しさと、樹が持っている斑(ふ)というのがあるんですけども、樹の中に入っている紋様ですね、それがばっちりマッチして、すごく素晴らしい寄木の文箱になっております。

脇なんかもまたちょっと紋様が違っておりまして、その分もこの作者はいろいろ考えながらやってるんだなと思って、僕はこの作者の感性がすごく良いなと思いました。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「糸目達磨釜」 長野 新)

これは茶釜ですね。お茶に使う釜なんですけども、周り中にずっと糸目の紋様が付いていて、オーソドックスな、本当に形がシンプルで、線が綺麗というか、そういう茶釜ですね。

結果的には、茶釜というのは使い勝手が良いというのが一番大きな条件だと思うんですけども、この茶釜は使ってみたら本当に使い易いんじゃないかなと。シックでそんな感じがします。

単純なんだけども、周り中のフォルムが綺麗で、僕は美しいなと思いました。

【第5部 書】

この2つの作品は委嘱出品者の中から選ばれた2賞ということになります。

(高田誠記念賞 「李道生詩」 新井 幽峰)

この高田誠記念賞をお取りになった新井幽峰さんの作品ですけれども、あまり大きな字を使わずに、ころころころと、転がっていくような非常にリズム感に長けた作品という

ことができるでしょう。あまり無理をするような運筆ではなくて手紙を書いているような調子とでもいいですか、そういう非常に心地よく響いてくるイメージを持った作品だと思います。気負いのない作品という言葉が一番端的かもしれませんね。

(埼玉県美術家協会会長賞 「李白詩句」 横田 北園)

こちらは埼玉県美術家協会会長賞をお取りになった横田北園さんという方の作品です。

ご覧いただくと分かると思いますが、淡い墨です。もともとこの墨は青い色が出る青墨(せいぼく)と呼ばれる墨で、それをお使いになっています。したがって、青っぽくふわっと温かみのある線が持ち味の墨なんですけど、それを上手く利用して流れるような運筆で、流麗なと言いますかね、一気にすーっと滑らかに運筆をしている非常に心地の良い雰囲気を出しているというように思われます。

(埼玉県知事賞 「王安石詩」 土屋 千秋)

今回の県展の書の部門の最高賞ということで、埼玉県知事賞を受賞された土屋千秋さんという方の作品です。

これも淡い墨でお書きになって、非常に小気味のいい流れを作っていると思います。あまり伸びすぎず、手が滞り過ぎず、行間の白、いわゆる行間の余白といいますけれども、そういうものも非常に美しく、白と、それと淡い線で書かれた文字、それらの調和が非常に見事にコントラストを作っているというようにいえると思います。

(埼玉県議会議長賞 「程本立詩」 町田 武山)

埼玉県議会議長賞をお取りになった町田武山さんという方の作品になります。

この作品の見どころというのですね、細かい字と大きな字、これらを上手く組み合わせられた作品です。要所要所にこういう風に大きな字が点在しています。と思うとこのように小さい漢字のところが入っていて、上手く調和を見せている作だなと。しかも、運筆においても、ゆっくり書いている部分と、非常にスピード感あふれる、スピードアップした運筆とを組み合わせられて仕上げられた作品だといえます。

小気味が良いという言葉が一番当たっているかもしれません。無理な表現といいですか、過度な、奇をてらった運筆もございませんし、流れ良く、小気味良いリズムで仕上げられた作だというようにいえると思います。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「故郷」 鈴関 春翠)

この作品ですが、埼玉県教育委員会教育長賞をお取りになった鈴関春翠さんという方の作品です。

これはですね、漢字かな交じり文といます。漢字と仮名を交えて書いている。これはいわゆる現代の言葉を書くということですね、ご覧になる方にも分かりやすく読めるとい

うことが主題になっています。

この文章ですけど、これは鈴関さんが自分でお作りになった言葉です。「暖かい黄色の菜の花が川邊に点在 やさしい薄紅の…」というようなですね。これは春にご自分が作られた文章だと思われます。

ところどころに墨を付けたところが点在しております。これがひとつの模様のように感じられて、そして、このひらがなの調和が非常に上手く出来上がっている作で、全体のまとめ方も、行間のこの白との対比も美しいといえる作品です。

この、調和体と呼んだり漢字かな交じり体と呼んだりするジャンルですけれども、まだまだ応募点数が少ないですね。でもやはり、親しみを持てるということから考えますと、これからますますこういうような作品にチャレンジして行っていただきたいというように思います。

【第6部】

私は今回写真部の審査員の一員を務めさせていただきました渡辺と申します。どうぞよろしくお願いたします。

さて、コロナ禍を要因とする約2年間の空白の後、待ち望んだ県展が開催されました。今回は搬入日が4日間ございましたが、結果出品数は1,001点に留まり、前回より約300点の減少になりました。しかしその内容は多岐に渡っての力作も多く、県内の写真愛好家の変わらぬ熱意に安堵いたしました。

審査は9名で行い、挙手、投票、さらにディスカッションも加え、複数回厳正に行いましたが、その間審査員を大いに悩ませつつ、469点の入選を決定いたしました。また、選外となった作品も紙一重のものが大変多く、大いに次回に期待できるものでした。

それでは上位3賞の講評をお伝えさせていただきます。

(埼玉県知事賞 「希望を乗せて」 高木 朝彦)

まず、「希望を乗せて」、高木朝彦さんの作品です。

今回の知事賞を獲得したこの作品ですが、今回の審査員の勇氣ある選択であったと言えると思います。それは、この作品には、これまでの写真的な価値観が見当たらないのがその理由で、例えば写真の特徴である細密な模写、あるいは魅力ある瞬間、そして美しい階調など、どこにも見当たりません。ただ漆黒の世界から近づく光と線路だけが闇から浮かび上がっているだけです。その、人の持つ想像力の深さと余韻が審査員の心にも届いた結果で、今回の収穫といえるでしょう。簡単に写実ができることを誇りとする写真のもう一つの表現方法を目にすることができました。

皆さんもこの作品の前に立ち、是非心の声で多くを語り合ってみてください。

(埼玉県議会議長賞 「幸福の肖像」 加藤 秀)

次に、「幸福の肖像」、加藤秀さんの作品です。

県議会議長賞のこの作品も、目で見えるドラマチックな模写は見られません。左右の人物は、いつもの場所でいつものように静かに佇んでいるだけです。これまで生き抜いてきた長い時間を静かに受け入れ、現在の幸福に浸っているように感じます。中央のマリア像は2人をそっと静かに見守るようでもあります。それを正方形の画面に収めたのは、対象と私とが語り合うための作者の必要条件だったのだと思います。

おそらくこの作品を目にする人の数だけ、幸福の物語をここに重ねることができることと思いますが、良い作品とは、作者自身も鏡のようにその中に映り込むことをいつも私たちに教えてくれます。

(埼玉県教育委員会教育長賞 「虹の小径」 入江 一男)

次に、「虹の小径」、入江一男さんの作品になります。

県教育長賞は打って変わって、大変フォトジェニックな視線が感じられます。この俯瞰した映像を目にすれば理解できる通り、画面の切り取り方や傘の色あるいは配置など、大変神経を使って写し止められたことが理解できます。それは作者の心に抱いたもう一つの世界に導く必要不可欠な条件だったからです。

一見何気ない日々の生活の中からの発見は、作者の感性と技術力があってこそその作品です。青い鳥は遠くには存在せず、いつも身近にあることを示してくれました。